
【主題】子どもの発達に即した環境設定

【副題】～園で考えた発達カリキュラムをもとに保育内容を考える～

【クラス名】 くりおね組

【研究の目的】

本研究の目的は、未満児クラスにおける子どもの発達を丁寧に理解し、一人一人に応じた質の高い保育を実現することである。未満児は月齢による発達差が大きく、同じクラスの中でもできることや興味関心、生活リズムに大きな違いが見られる。そのため、子ども一人一人の発達段階を的確に捉え、それぞれに合った関わり方や環境構成を行うことが重要である。こうした個別対応は、子どもの主体性や安心感を支え、健やかな発達につなげると考えられる。

未満児クラスでは、生活面や安全面での援助が多く、保育者の配置人数も比較的多いため、保育者同士の連携や情報共有が特に重要となる。日々の保育の中で観察された子どもの姿や発達の様子をチーム全体で共有することで、保育の方向性を統一し、より質の高いチーム保育を実現できる。また、チームとして子どもを見守る体制を整えることは、保育者の専門性を活かした関わりの質の向上にもつながる。

さらに、未満児クラスでは初めて子育てを経験する保護者と関わる機会が多い。そのため、保育者自身が乳幼児期の発達について理解を深め、月齢や発達段階に応じた子どもの姿を把握しておくことが、保護者への適切な助言や安心感の提供につながる。保護者が抱える育児への不安や戸惑いに対して、保育者が的確なサポートを行うことは、家庭と保育園の連携を強化するうえでも重要である。

加えて、本園では独自に作成した発達カリキュラムに基づき保育を行っているが、実際の子どもの発達の姿とどの程度一致しているか、またどのような違いがあるかを比較・検証することも本研究の重要な目的である。カリキュラムと実際の保育の観察結果を照らし合わせることで、その妥当性を見直し、改善点を明らかにし、現場に即した実践的な保育内容の構築につなげることができる。

現代の子育て環境は、核家族化の進行や地域とのつ

ながりの希薄化などにより大きく変化しており、保育現場にはこれまで以上に専門的な支援が求められている。こうした状況を踏まえ、子どもの発達段階に応じた質の高い保育の提供と、保護者への支援・助言の充実を両立させることが、本研究の最終的な目標である。

【研究の進め方・概要】

本研究では、まず園独自の発達カリキュラムを基に、月齢ごとの発達段階をまとめた発達表を作成する。その発達表と、現在在籍している子どもたちの姿を照らし合わせながら、それぞれの子どものがどの段階にあり、どのような発達や育ちが見られるのかを丁寧に把握していく。また、実際の子どもの姿と見比べる中で見られた新たな発達や育ちについては、発達表に書き加え、より実態に即した内容へと整理していく。

さらに、子どもの興味や関心、発達に必要な援助について保育者同士で共有し、チームとして子どもの姿を捉えながら、その子に合った保育内容を検討し実践していく。年間を通して発達表とカリキュラムを見比べながら、その違いや気づきを整理し、実際の子どもの姿との関連を考察する。

最後に、実践してきたチーム保育の内容や子どもの姿を、文章や写真を用いて記録・整理し、保育の実践を振り返りながら研究の成果と課題をまとめていく。これらの取り組みを通して、子どもの発達に即したより質の高い保育の実現を目指す。

【取り組み内容・実践例】

(運動面)

○歩行が安定するまでの取り組み（散歩）

未満児期は月齢差による発達の個人差が大きく、歩行の安定にも違いが見られる。そのため本クラスでは、子ども一人ひとりの発達段階に合わせ、段階的に歩行経験を積み重ねることを意識して保育を行った。まずは身体を支えながらその場で立つ経験を大切に、安

定して立てるようになった子どもから保育者と手をつないで歩く経験を取り入れた。初めは両手で支えながら歩き、慣れてきた段階で片手に移行するなど、子どもの様子を見ながら無理のない形で歩行を促した。

また、家庭での歩行の様子について保護者と共有し、家庭でも靴を履いて歩く経験ができるよう働きかけることで、園と家庭の経験がつながるよう配慮した。園庭や公園では自由に歩く時間を設け、戸外で靴を履いて歩く経験を積み重ねることで、歩くことへの不安や抵抗感の軽減を図った。散歩の際には子どもの体力や疲れの様子に配慮しながら距離やペースを調整し、無理なく歩行経験を重ねられるようにした。

さらに、アオーレ長岡や三八市など普段とは異なる場所への外出も取り入れ、新しい環境の中で歩く経験や周囲の景色に触れる機会を設けた。こうした経験は歩行能力の向上だけでなく、子どもの興味や探索活動を広げることにもつながっていたと考えられる。

2月には保育室において、お散歩リングを用いた歩行の練習を音楽に合わせて行った。活動は意欲のある子どもから取り入れ、無理のない形で経験できるように配慮した。3月には進級後の活動を見据え、戸外散歩の際にもお散歩リングを使用した。歩行が安定している子どもであっても、リングを持って集団で歩く場面では歩幅の違いや月齢差により歩きにくさを感じる様子も見られ、集団で歩く経験には個々の発達だけでなく全体のバランスも関係することが確認された。

○バランス力（体幹）

室内活動では、体幹やバランス感覚の発達を促すことを目的として、サーキット遊びを取り入れた。具体的にはソフト積み木やミニ平均台、デコボコ道などを設置し、渡る、乗る、またぐなど様々な身体の動きを経験できる環境を整えた。

活動当初は保育者と手をつなぎながら慎重に渡る姿が多く見られたが、繰り返し経験する中で自分から挑戦しようとする姿が見られるようになった。月齢や発達段階によっては、遊具の上を渡ることよりも、積み木に触れたり並べたりするなど素材そのものに興味を示す姿も見られた。しかし、友だちが活動する様子を見ることや同じ環境での経験を重ねることで、「やってみたい」という気持ちが芽生え、遊び方が広がっていく様子が見られた。

3月末には、ソフト積み木の三角をつなげた上を保育者と手をつなぎながら歩く姿も見られるようになり、

継続した活動が子どもの身体の使い方や自信につながっている様子がうかがえた。

○リズム・音楽表現

主活動の中では、保育番組など子どもたちが日常的に親しんでいる音楽や体操を取り入れ、音楽に合わせて身体を動かす経験を行った。年度当初は立つことが難しい子どもも多く、体を揺らす、手を叩くといった動きが中心であったが、活動を重ねる中で身体の動かし方に変化が見られるようになった。

3学期頃になると、音楽に合わせて足を上げる、回る、ジャンプするなど、全身を使った動きが増え、子どもたちの運動機能や表現の幅が広がっている様子が見られた。音楽を通した活動は、楽しさを感じながら身体を動かす経験につながり、運動への意欲を高める役割もあったと考えられる。

また、2月にはお遊戯会があり、他学年の発表を見る機会を設けた。進級後には自分たちも参加することを見据え、上級生の姿を見ることで、子どもたちなりに興味や関心を持つ様子が見られた。兄弟関係や預かり保育などで知っているお兄さんやお姉さんの姿を見つけると、集中して見つめる姿も多く見られ、こうした経験が今後の活動への期待や憧れにつながっていくことが考えられる。

（微細運動）

○シール貼り

指先を使う活動として、シール貼りを取り入れた。月齢や家庭での経験により取り組み方には個人差が見られ、初めはシールの向きが分からない、指先で丸めてしまう、うまく剥がせないといった姿も見られた。そのため、保育者がシールの端を少し剥がしておいたり、一枚ずつ手渡したりするなど、子どもの発達段階に応じた援助を行った。こうした関わりを通して、次第に「自分でやってみたい」という意欲が見られるようになり、保育者にやりたいことを伝える姿や、自分で剥がして貼ろうとする姿が増えていった。

活動を繰り返す中で、どちらの面を下にすれば貼ることができるのかを理解する子どもも多く見られ、指先の操作や認識面での成長も確認された。活動の様子は連絡帳等を通して家庭にも伝えたことで、家庭でもシール遊びを取り入れるようになったという声があり、園での経験が家庭での遊びへと広がる様子も見られた。

○お絵描き

指先や腕の動きが発達し、「握って動かす」という動

作が見られるようになった時期を目安に、お絵描きの活動を取り入れた。本クラスでは年明け頃から開始し、月齢の低い子どもでは1歳2か月頃に初めて経験することとなった。導入の時期については、それ以前はクレヨンなどを口に入れてしまう姿が見られることや、物を握って操作する力がまだ十分ではない様子もあったため、子どもの発達段階を考慮して設定した。使用する画材については、描いた線が乾いた後に手や衣服に付きにくく、子どもの作品をきれいな状態で残すことができるテンペラクレヨンを使用した。これにより、子どもがのびのびと描くことができる環境づくりを意識した。

活動の中では、初めての経験に戸惑いを見せる子どももあり、好きな色を選ぶことやクレヨンを持ってみるといった行動に至るまで時間がかかる姿も見られた。そのため保育者がすぐに働きかけるのではなく、子ども自身が「やってみたい」と感じるタイミングを大切にし、あえて言葉をかけずに見守る関わりを意識した。実際に描き始めた段階で声をかけるなど、子どもの主体性を尊重しながら援助を行うことで、次第に大きく腕を動かしながら思い切り描き込む姿が見られるようになった。

一方で、クレヨンの向きが反対になると線が描けないことに戸惑う姿も見られたため、その点についてはさりげなく持ち方や向きを整えるなどの援助を行った。こうした経験を通して、子どもたちは描くことの楽しさを感じながら、少しずつ道具の扱い方にも慣れていく様子が見られた。

【言葉面】

○絵本の活用

言葉の発達を促す取り組みとして、日常の保育の中で絵本の読み聞かせを積極的に取り入れた。絵本の読み聞かせは、保育者と子どもとのコミュニケーションの一つとして大切にしながら行い、絵本に登場する物の名前や言葉を耳で聞く経験を積み重ねることをねらいとした。

子どもたちは次第に自ら本棚から絵本を選び、保育者のもとへ持ってきて読んでほしいと伝える姿が見られるようになった。言葉の理解が進むにつれて、読み聞かせの中で聞いた言葉をオウム返しのように繰り返して反応したり、ページをめくりながら指差しをして物の名前を言おうとする姿も見られるようになった。

また、絵本の中で知った言葉や物の名前が、日常の保育活動の中で実際に見られた際に、自分から言葉として発する姿も見られ、絵本を通した経験が言葉の理解や表出へとつながっている様子がうかがえた。

○興味を持った絵本の掲示

子どもたちが特に興味を示した絵本『だるまさんが』については、絵本の各ページを保育室の壁に掲示し、日常的に目に触れられる環境を整えた。馴染みのある絵本であったことから、掲示された「だるまさん」を指差す姿や、月齢の高い子どもでは絵本の中の効果音を口にする姿も見られた。絵本を読む場面だけでなく、保育室の環境の中でも言葉やイメージに触れることができるようにすることで、子どもたちの興味や言葉への関心を広げることにつながったと考えられる。

○好きなもの・知っているものの掲示

保育室の環境構成の一つとして、子どもが興味を持ちやすい視覚的な教材を取り入れた。夏頃、保育室の壁に色画用紙を掲示したが、その時点では子どもたちの反応はほとんど見られなかった。そこで、色だけでなく同じ色の物の写真を色ごとに分類して掲示したところ、月齢の高い子どもを中心に物への興味が見られるようになった。

子どもが指差した物に対して保育者が名前を伝える関わりを繰り返すことで、言葉の理解が徐々に進み、オウム返しをする姿や、保育者に尋ねなくても自分から言葉にする姿が見られるようになった。また、覚えた乗り物の名前などは散歩の際に実物を見つけると声に出して伝える姿も見られ、視覚的な環境と実体験が結びついて言葉として定着していく様子が確認された。このように、言葉の理解が十分に進む前の段階から、視覚や聴覚を通して言葉に触れられる環境を保育室の中に整えることを意識した。継続して関わる中で、色や物の名前など子どもが理解し発する言葉が少しずつ増えていく様子が見られ、環境構成と言葉の発達との関連を感じることができた。

○個人マークの活用

子どもが自分の名前や身の回りの物への理解が進み始めた時期から、個人マークを保育の中で活用した。主に椅子に個人マークを付けたり、朝の会の際にフラッシュカードのように個人マークを見せながら呼名を行うなど、日常の生活場面の中で繰り返し目に触れるようにした。

その結果、月齢の高い子どもから徐々に自分の個人マークを覚える姿が見られ、手洗い後に自分のマークが付いている椅子へ自分で座ることができるようになった。また、活動を重ねる中で他児のマークにも関心を持つようになり、友だちのマークを覚えて「ここ」「だめ」など子どもなりの言葉で知らせる姿も見られた。こうした姿から、個人マークを通して自分だけでなく友だちへの意識も少しずつ芽生えてきている様子がうかがえた。

さらに、個人マークへの理解が進んできた頃には、遊びの一つとして個人マークを使った簡単なカルタ遊びを取り入れた。活動では、保育者と子どもが1対1で向かい合い、3〜4枚程度の個人マークが描かれたカードを並べ、保育者が呼んだ名前のマークを取るという遊びを行った。初めは自分のマークが分からず戸惑う姿も見られたが、繰り返し取り組むことで次第に自分のマークを見つけて取ることができるようになり、さらに友だちのマークにも気付く姿が見られるようになった。

このように、個人マークを日常生活や遊びの中で継続して活用することで、自分の名前や友だちの存在への理解が深まり、子ども同士の関わりにもつながっていく様子が見られた。

【考察】

本研究を通して、子どもの発達を丁寧に捉えながら保育を行うことの重要性を改めて感じることができた。一方で、今後の課題としていくつかの点も見えてきた。まず、未満児クラスでは月齢差による発達の違いが大きいため、一つの活動の中でも子ども一人ひとりの発達段階に応じた関わりや環境設定をさらに工夫していく必要があると感じた。また、活動の内容によっては月齢差により難しさを感じる場面も見られたため、個々の発達をより丁寧に把握しながら柔軟に対応していくことが求められる。

さらに、チーム保育の中で子どもの姿や気付きを保育者同士で共有し、保育の方向性を共通理解していくことも重要である。日々の小さな変化や成長を共有することで、子ども一人ひとりに合った保育の実践につながっていききたい。

また、園独自の発達カリキュラムと実際の子どもの発達の姿を見比べる中で、必ずしもカリキュラム通りに発達が進むわけではないことも感じられた。今後も

子どもの実態を基に発達表やカリキュラムを見直し、より現場の実態に合った保育内容へと改善していく必要があると考える。

今後も子どもの発達を丁寧に見取りながら、保育者同士の連携や保護者との情報共有を大切にし、子ども一人ひとりにとって安心して成長できる保育環境を整えていきたい。

【まとめ】

本研究では、園独自の発達カリキュラムを基に月齢ごとの発達段階を整理し、実際の子どもたちの姿と照らし合わせながら保育実践を行った。未満児期は月齢による発達差が大きい時期であるため、子ども一人ひとりの発達段階を丁寧に捉え、それぞれに合った環境設定や関わりを行うことが重要であることが改めて確認された。

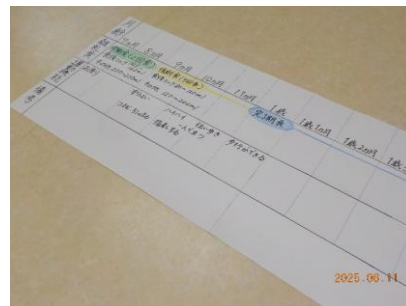
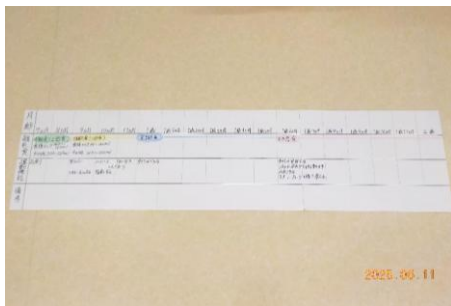
運動面や言葉の発達に関わる活動、環境構成などを継続して行う中で、子どもたちは自分のペースで経験を積み重ね、少しずつできることを増やしていく姿が見られた。また、絵本の活用や掲示物、個人マークなどを取り入れることで、子どもが自然と興味を持ち、言葉や生活習慣の理解につながっていく様子も確認できた。さらに、保育者同士で子どもの姿を共有しながら保育を進めることで、チームとして子どもの発達を支える視点の重要性も再認識された。

加えて、この時期はまだ言葉でのやり取りが未熟であるものの、様々な物や体験を通して学ぶための土台を作る大切な時期であると考えられる。保育の中で多様な興味や関心に触れる機会を提供することは、運動面や言語面だけでなく、社会性や認知、感情の発達など、子どもたちの多面的な成長につながると考えられる。

今後も、子どもの実際の姿を基に発達カリキュラムとの関連を見直しながら、子ども一人ひとりの育ちを大切に保育を継続していくことが必要である。未満児期の発達を丁寧に捉え、子どもが安心して様々な経験を積み重ねられる環境を整えることが、より質の高い保育の実践につながると考える。

【資料1】(活動の様子)

【発達表】



【お散歩リングの練習】



【サーキット遊び】



【シール貼り】



【お絵描き】



【掲示物】



【個人マークの活動】



【資料2】(今年度園児の発達を反映したカリキュラムグラフ)

Aちゃん (入園時11ヶ月・現在1才11ヶ月)

粗大運動機能		6か月～9か月未満	9か月～1歳0か月未満	1歳	1歳1か月未満	1歳1か月～1歳2か月未満	2歳	2歳5か月～
手と胸指と人差し指は開いている 胸指が外に出て指頭を離ることができ 物を握って両手でとる 保母と手差し 右手と左手で玩具を両手離せる 手遊び 模倣ができるはいはい、ちょうだい 組紐、人差し指でつまむ はさみ行動がきれいになる 物を握って歩く 物を押して歩く ボールを助けて回ったりする 片足をあげる、片足をスポンに入れる スポンに脚を入れる 歩歩リンダ 踏み木遊び シールをはがす、貼る	入園前	入園前						
	入園前	入園前						
	入園前	入園前						
	入園前	入園前						
	入園前	入園前						
はい歩きをする ボールを転がす ボールを上に投げ ボールを助げる(手のひらサイズ) 歩息はじめる	入園前	入園前	1歳					
	入園前	入園前	1歳					
	入園前	入園前	1歳					
	入園前	入園前	1歳					
	入園前	入園前	1歳					

Bちゃん (入園時6ヶ月・現在1才6ヶ月)

粗大運動機能		6か月～9か月未満	9か月～1歳0か月未満	1歳	1歳1か月未満	1歳1か月～1歳2か月未満	2歳	2歳5か月～
手と胸指と人差し指は開いている 胸指が外に出て指頭を離ることができ 物を握って両手でとる 保母と手差し 右手と左手で玩具を両手離せる 手遊び 模倣ができるはいはい、ちょうだい 組紐、人差し指でつまむ はさみ行動がきれいになる 物を握って歩く 物を押して歩く ボールを助けて回ったりする 片足をあげる、片足をスポンに入れる スポンに脚を入れる 歩歩リンダ 踏み木遊び シールをはがす、貼る	入園前	入園前						
	入園前	入園前						
	入園前	入園前						
	入園前	入園前						
	入園前	入園前						
はい歩きをする ボールを転がす ボールを上に投げ ボールを助げる(手のひらサイズ) 歩息はじめる	入園前	入園前	1歳1ヶ月					
	入園前	入園前	1歳					
	入園前	入園前	1歳2か月					
	入園前	入園前	1歳3か月					
	入園前	入園前	1歳3か月					

発達運動		6か月～9か月未満	9か月～1歳0か月未満	1歳	1歳1か月未満	1歳1か月～1歳2か月未満	2歳	2歳5か月～
手と胸指と人差し指は開いている 胸指が外に出て指頭を離ることができ 物を握って両手でとる 保母と手差し 右手と左手で玩具を両手離せる 手遊び 模倣ができるはいはい、ちょうだい 組紐、人差し指でつまむ はさみ行動がきれいになる 物を握って歩く 物を押して歩く ボールを助けて回ったりする 片足をあげる、片足をスポンに入れる スポンに脚を入れる 歩歩リンダ 踏み木遊び シールをはがす、貼る	入園前	入園前						
	入園前	入園前						
	入園前	入園前						
	入園前	入園前						
	入園前	入園前						
はい歩きをする ボールを転がす ボールを上に投げ ボールを助げる(手のひらサイズ) 歩息はじめる	入園前	入園前	1歳2か月					
	入園前	入園前	1歳2か月					
	入園前	入園前	1歳					
	入園前	入園前	1歳					
	入園前	入園前	1歳					

発達運動		6か月～9か月未満	9か月～1歳0か月未満	1歳	1歳1か月未満	1歳1か月～1歳2か月未満	2歳	2歳5か月～
手と胸指と人差し指は開いている 胸指が外に出て指頭を離ることができ 物を握って両手でとる 保母と手差し 右手と左手で玩具を両手離せる 手遊び 模倣ができるはいはい、ちょうだい 組紐、人差し指でつまむ はさみ行動がきれいになる 物を握って歩く 物を押して歩く ボールを助けて回ったりする 片足をあげる、片足をスポンに入れる スポンに脚を入れる 歩歩リンダ 踏み木遊び シールをはがす、貼る	入園前	入園前						
	入園前	入園前						
	入園前	入園前						
	入園前	入園前						
	入園前	入園前						
はい歩きをする ボールを転がす ボールを上に投げ ボールを助げる(手のひらサイズ) 歩息はじめる	入園前	入園前	1歳					
	入園前	入園前	1歳4ヶ月					
	入園前	入園前	1歳					
	入園前	入園前	1歳4ヶ月					
	入園前	入園前	1歳4ヶ月					

言葉		6か月～9か月未満	9か月～1歳0か月未満	1歳	1歳1か月未満	1歳1か月～1歳2か月未満	2歳	2歳5か月～
喃言を發する 出しがけと喃言で答える まがい、指差し行動 おひらがなをいふふいふ、おひらがなをいふ 簡単な一語文がでる 二語文が始まる 呼名で「はい」と返事が出来る 言葉の名前がわかる 個人シール、マークの理解	入園前	入園前						
	入園前	入園前						
	入園前	入園前	1歳1ヶ月					
	入園前	入園前	1歳					
	入園前	入園前	1歳3か月					
喃言を發する 出しがけと喃言で答える まがい、指差し行動 おひらがなをいふふいふ、おひらがなをいふ 簡単な一語文がでる 二語文が始まる 呼名で「はい」と返事が出来る 言葉の名前がわかる 個人シール、マークの理解	入園前	入園前	1歳1ヶ月					
	入園前	入園前	1歳1ヶ月					
	入園前	入園前	1歳1ヶ月					
	入園前	入園前	1歳1ヶ月					
	入園前	入園前	1歳1ヶ月					

言葉		6か月～9か月未満	9か月～1歳0か月未満	1歳	1歳1か月未満	1歳1か月～1歳2か月未満	2歳	2歳5か月～
喃言を發する 出しがけと喃言で答える まがい、指差し行動 おひらがなをいふふいふ、おひらがなをいふ 簡単な一語文がでる 二語文が始まる 呼名で「はい」と返事が出来る 言葉の名前がわかる 個人シール、マークの理解	入園前	入園前						
	入園前	入園前						
	入園前	入園前	1歳					
	入園前	入園前	1歳1ヶ月					
	入園前	入園前	1歳					
喃言を發する 出しがけと喃言で答える まがい、指差し行動 おひらがなをいふふいふ、おひらがなをいふ 簡単な一語文がでる 二語文が始まる 呼名で「はい」と返事が出来る 言葉の名前がわかる 個人シール、マークの理解	入園前	入園前	1歳					
	入園前	入園前	1歳					
	入園前	入園前	1歳					
	入園前	入園前	1歳					
	入園前	入園前	1歳					

※欄は発達項目に設定した様子の自己月齢
入力されている月齢は本児が達成した月齢